

# 都市高齢者の近隣交際量の分析

小田 利勝

親密度の異なる 8 つの付き合いを設定して高齢者の近隣交際量を測定した。分析データは、無作為抽出された神戸市在住の 65 歳以上の男女 5 千人を対象に行った郵送調査で得られたものである。大多数の高齢者はかなり多くの人たちと単なる「あいさつ」以上の近隣関係を取り結んでいる。高齢者の近隣交際量を規定している要因を種々の変数を用いた重回帰分析で探ったところ、どの付き合いにも共通する影響力の強い要因は、各種集団や組織への「参加・活動度」、「積極的親密性」、「居住年数」であり、今日の近隣関係がすぐれて個人の主意的選択事項であることがあらためて確認された。そして、親密な近隣関係を多くの人と結んでいる人ほど老後の幸福感が高いことが明らかにされた。以上のような結果から、高齢者が参加・活動可能な種々の地域集団を育成することが、近隣関係ひいてはコミュニティに関わる施策の課題となることが示唆された。

キーワード：高齢者、近隣関係、幸福感、重回帰分析、神戸

## 1. 目的

ワース(Wirth, 1938)が生活様式としてのアーバニズム(urbanism)を論じる中で都市的生活様式の特質として非人格的で匿名的な社会関係をあげて以来、都市における近隣関係は希薄であり、一面的であり、冷たいものだ、という見方は、いわば常識として広く支持されてきた。言うまでもなく、例えば Giddens(1989)も紹介、議論しているように、ワースの見解を反証する研究や事例も少なくないから、都市における社会関係に関する否定的見解を過度に一般化することは現実に対するゆがんだステレオタイプの見方を増強してしまうことになる。今日では近隣関係の問題を単純素朴な都市-農村二分法(urban-rural dichotomy)で議論するようなことはないが、都市における近隣関係に関する考察の基本的枠組みは、依然としてワースのいうアーバニズムであるといつてよいであろう。

日本において、そうしたアーバニズムの文脈から近隣関係の崩壊や住民の地域連帯感の喪失といったことが盛んに論議されるようになったのは高度経済成長期の 1960 年代からであり、主として行政の施策過程においてであった。その代表的なものが 1969 年の国民生活審議会調査部会・コミュニティ問題小委員会報告『コミュニティ - 生活の場における人間性の回復 - 』であった。行政の場で「コミュニティ」という言葉が頻繁に使われるようになったきっかけを作ったのもこの報告書であり、今日に至るまで、「コミュニティ」は中央各省庁や都道府県、市町村の地

域政策の一種のスローガンとして、また、さまざまな地域問題を解決する万能薬あるいは一種のおまじないのようなシンボリックな政策用語として使われてきている。そして、これまでに、“失われた地域連帯の再生”や“住民相互の心の通ったふれあいによる人間性の回復”を図るために「コミュニティ」づくりが重要施策として各地で進められてきたが、高齢化の進展に伴って高齢者に対するコミュニティ・サポートの意義と必要性への認識の高まりなどから、「コミュニティ」や近隣関係にあらためて関心が向けられるようになった(たとえば、金子, 1996; 古谷野ほか, 2000)。

近隣関係は、ソーシャル・サポート・ネットワークの重要な要素として早くから注目され、研究されてきたが(Wenger, 1984; Sauer and Coward, 1985; Litwin, 1996, Krause, 1998)、そうした中で、高齢者自身は日常的に何人(何軒)くらいとどのような関係を取り交わしているか、そして、その要因は何か、というごく基本的な事実に関しては、最近になって大量標本を用いた研究が幾つか試みられるようになったが(上羽, 2001; 高田, 2002)、意外なことと言ってもよいが、十分に明らかにされているとは言い難い。そこで、本稿では、神戸という大都市に居住する高齢者の近隣交際量とその要因を明らかにすることによって、この課題に対して一つの知見を提供するとともに、都市高齢者の近隣関係の特質と近隣関係をめぐる地域政策の課題を探ることにする。

## 2. 研究の枠組みとデータ

### (1) 現代社会における近隣関係

人間が集落(聚落)を形成して定住生活を始めたとき、近隣関係は、もっとも包括的で多機能的な社会関係であったに違いない。人々は、個人あるいは家族だけでは充足・達成できない(水準の)欲求や必要の全てを、近くに住む個人や家族との直接的な互助的關係の中で充足していた。というよりは、そうした必要や欲求を充足するにはそうするほかはなかったのである。労働や治安、防災、保健・衛生、娯楽など、生存・生活のための必要や欲求は、個人あるいは家族だけで行うよりも、共同で行った方が、より容易に、また、より高い水準で充足でき、しかも、より生産的で効率的であった。

人が群れて/群がって住むようになったのは、そうする必然性があったからであり、近隣関係は、いってみれば道具的・手段的關係として成立したということである。人々のそうした關係が維持されている状態がムラ(群、叢、簇)であり、そこは、他とは区別される自己充足的な特定の場所(地理的範囲)であるムラ(村)であった。このように、近隣関係は、何よりもまず機能的關係として成立、発展していった。したがって、そうした關係から離脱する、あるいは排除されることは、生命が維持されている状態としての生存は可能であっても、より高次のさまざまな欲求が充足される過程としての生活は不可能になることを意味する。そうした近隣關係の累積体としての近隣社会、そして、それを一定程度の地理的範囲として認識したときのムラ(村)という地域社会は、まさに共同社会であり、小宇宙であったのである。

生産技術の向上はじめ各種技術や知識の発展は、近隣關係を変質させることになった。労働をはじめ生活のあらゆる領域における關係は、同質的要素間の機械的連帶關係から異質的要素間の有機的連帶關係へと变化した。近隣關係は、人間と人間の丸ごとの關係としてではなく、その人間のある部分と別の人間のある部分との機能的關係に変わっていったということである。そして、

社会関係における直接接触の関係よりも間接的関係の比重が増すことによって関係の網の目は急速に拡大していった。その結果、近隣関係における包括性や多機能性は失われ、近隣社会は自己充足的な地域的範囲ではなくなった。高度化した欲求はもはや近隣においては充足できなくなった、ということである。こうして近隣の住民相互が濃密な関係を取り結ぶ必然性が薄れていったのである。

都市化に伴う近隣関係の崩壊とは、近隣関係がなくなったということではない。都市化は高密度の近隣社会を作ることになったから、近隣関係成立の契機と機会はむしろ増加することになったといえる。近隣関係の崩壊とは、近隣において濃密な関係を取り結ばざるを得ない事情、あるいは、そうすることが誰にとっても利益になるがゆえにそうすることを誰もが望むという動機がなくなった、ということである。かつてとは比較にならないほどに群れの規模は拡大し、群れの密度は高くなったにもかかわらず近隣関係が希薄化するという現象が生じたのは、近隣関係を取り結ばなくても自己の必要や欲求が充足されるようになったからである。言い換えれば、近隣関係を取り結ぶ、取り結ばない、あるいは、どの程度の関係を取り結ぶかは、個人の主意的選択事項になったということである。このことは、模式的に言えば、道具的・手段的關係として成立した近隣関係が、表出的・情緒的關係に変質したことを意味する。「コミュニティ」施策において、“住民相互の心の通ったふれあいによる人間性の回復”といったような情緒的表現が使われてきたのも、そのためである。

高齢者に対するコミュニティ・サポートの意義と必要性に関する近年の論議は、以上に述べたような近隣関係の変質過程からいえば、近隣関係を道具的・手段的關係として再編・復活させようとするものであるといえる。ただし、それは、かつてのような包括的・多機能的な近隣関係の復活への関心ではなくて、近隣関係を高齢者支援という単機能的な関係に再編しようとする関心であるといえる。すでに、各地で行われている各種地域団体や自主的グループ、NPO などによる高齢者に対するさまざまな形態の支援活動は、まさにそうしたことの兆しともいえる。近隣関係へのこうした関心は、近隣関係の変質過程の問題として興味深いところであるが、現代の都市社会において、近隣関係をそのようなものに再編できるか否かは、これまで述べてきたところからすれば、住民にとってそうすることがどの程度必要なのか、あるいはそうせざるを得ないという必然性がどの程度のものか、ということにかかっているといえる。しかし、また、これからの近隣関係の問題を考える場合には、そうした枠組みとは別の枠組みを用意することも必要かもしれない。本稿では、近隣関係は今日そうした変質過程にあるということを念頭に置きながら、今日の高齢者が日常的に取り結んでいる近隣関係の量と質を測定することとする。

## (2) 近隣関係の測定項目と近隣の範囲

今日の近隣関係がすぐれて主意的選択事項であるとすれば、関係の内容と規模(質と量)は個人によって千差万別である。しかし、近隣関係に関する個人間や地域間の量的比較を可能にするには、近隣においてそうした関係を取り結ぶ可能性があると考えられる内容をあらかじめ用意する必要がある。今回の調査では、偶発的あるいは特殊な関係にではなく、比較的恒常化した関係に着目して、親密さの程度を想定して後に示すような8項目を取り上げた。「顔を合わせば、あいさつをする」がもっとも親密度が低く、以下、番号が大きくなるにつれて親密度が高くなると想定した。それら個々に関して、「近所には次のような『付き合い』をしている方を何人くらい持っていますか」と尋ねて、人数の記入を求めた。

今回の調査では人数の記入を求めたが、「近所づきあい」は、個人単位ではなくて世帯単位（いわゆる家族ぐるみ）のものもありうるし、世帯単位で考えた方が適切と考えられる場合もある。例えば、上記の「顔を合わせば、あいさつをする」付き合いのある相手は、世帯単位でいえば、相手が単独世帯であろうと三世代世帯などの多人数世帯であろうと、どちらも1軒（1世帯）であるが、個人単位で考えれば、あいさつをする相手は前者では1人であるが、後者では1人かもしれないし3人あるいは5人かもしれない。今回の調査での質問提示の仕方は、「何人」と個人単位であるから、回答には相手の世帯規模が反映されていることになる。

ところで、近隣関係と言った場合、近隣の広がりをもどの程度のものであると考えるかが問題になる。辞書の説明では、近隣（きんりん。近所となり。近辺）は近隣（ちかどなり。近い隣家）であり、「隣」とは横に相接した位置のことをいう。隣国といえば、自国と国境を接した周りの国である。向こう三軒両隣という表現がある。自分の家の前面に位置する3軒と両隣の2軒の計5軒のことをいう。これらの家々とは他の家よりも日頃顔を合わせたり接触する機会が多い。そこで、この表現には、これら5軒は親しく交際する相手になる（なりやすい）が、逆に、親しくしないとその場所に住みにくくなる、という意味が込められている。かつての隣保制度の単位ともなった。第二次大戦下の1940年に国民統制のために制度化されて戦後の47年まであった隣組（となりぐみ）は、町内会・部落会の下に数軒を一単位として作られ、食糧その他生活必需品の配給などを行なった。

以上のような意味での近隣は、かなり狭い範囲にある少数の家々を指す。これに対して、都市計画で近隣住区というと、小学校を中心に店舗・レクリエーション施設などを備えた人口8千人から1万人程度の住宅区域を指す。少数の家々である近隣の一大集合体ということもできるが、1万人の住宅区域の範囲で「近所づきあい」を考える人はそう多くはないであろう。しかし、近隣や近所という言葉は、本来、明確な境界をもった固有の範囲を指すものではなくて、比較的近い範囲という漠然とした空間的広がりを表現するときに使われる。したがって、その人の生活行動や関心に応じて、その広がりに対する認識にはかなりの違いがあっても不思議ではない。今回の調査でも、「近所」の広がりについては個々の回答者の判断に委ねた。したがって、本稿で明らかにされる近隣交際量は、正確に言えば、回答者自身が「近所づきあい」とみなした限りにおいての交際量ということになる。

### （3）交際量の規定因

一般に、居住年数が長くなれば、より多くの人と、より親密な近所づきあいをするようになると考えられる。古いデータではあるが、1981年に札幌における18歳以上の男女1万人を対象にした調査の結果では（回答者7,600人）、居住年数が5年以上になると交際量は急激に増加した（小田，1983）。しかし、20年以上になるとそれほど増加することはない、親密度の高い付き合いではむしろ減少した。こうした傾向は年齢にも観察され、40～50代の交際量が最も多く、60歳以上になると減少する傾向がみられた。

仕事の有無も近隣交際量を左右するであろうが、居住地から遠いところへ通勤している場合と居住地で働いている場合とでは、ともに在職中であることには変わりがないが、前者は后者よりも交際量は少ないと考えられよう。居住地にある何らかの団体や組織、クラブやサークルに加入していれば、そうでない場合に比べて近隣交際量は多くなるであろう。また、いわゆる人付き合いがよい人はそうでない人に比べて近隣交際量は多いであろうし、健康状態が十分ではなかった

り身体的な活動能力の水準が低ければ近所づきあいもままならないであろう。さらに、居住地の地域特性や居住地の評価、そして、居住意向も近所づきあいの質と量と無関係ではないであろう。

そうしたことを検証するために、本稿では、性や年齢といった人口学的属性と学歴（就学年数）、世帯形態、職の有無、家計水準（所得）、住宅の種類といった社会的属性に加えて、クラブやサークル、各種団体等での参加・活動の程度、主観的健康感や主観的老化度（小田，2001；2002）、社会関係に関わるコンピテンスの一つである積極的親密性（小田，2002）、そして居住地の特性を説明変数とする重回帰モデルによって近隣交際量を規定している要因を明らかにする。そして、近隣関係が高齢期の幸福感に与える影響に関して、老後生活観とアフェクト・バランスの測定尺度（小田，2001；2002）を用いて検討する。

参加・活動の程度は以下のようにして求めた。「町内会・自治会」、「地域の婦人会」、「各種の女性団体・婦人部」、「老人クラブ」、「経営・経済団体・組織」、「政治団体・後援会」、「スポーツ関係の会・クラブ・サークル」、「スポーツ以外の趣味の会・クラブ・サークル」、「学習・教養の会・クラブ・サークル」、「ボランティア団体・組織・会」、「環境保護や住民活動・運動の会・団体・組織」、「宗教関係の団体・組織・会」の12項目を提示し、それぞれについて、「加入しており、いつも活動に参加している」、「加入しており、時々活動に参加している」、「加入しているが、たまにしか活動に参加しない」、「加入しているが、活動には参加したことはない」、「加入していない」のいずれか一つを選択することを求めた。そして、それぞれに5～1点を与え、それらの合計点を参加・活動度とした。クロンバックの $\alpha$ は0.7346である。

世帯形態や主観的健康感、住宅の種類、居住地の特性はカテゴリ変数をダミー変数化して数値変数とした。世帯形態に関しては「その他世帯」、主観的健康感に関しては「どちらともいえない」を、住宅の種類と居住地類型では「その他」を除外カテゴリとした。

#### （4）データ

本稿で扱うデータは、無作為抽出された神戸市在住の65歳以上の男女5,000人を対象とする郵送調査から得られたものの一部である。対象者の抽出方法は次の通りである。まず、1999年1月31日現在の神戸市における65歳以上人口236,874人の区別分布に基づいて5,000票を全9区に比例配分した。次に、各区から8つの投票区を乱数を用いて無作為に抽出し、各投票区の選挙人名簿を用いて、あらかじめ乱数を用いて決めておいた最初の抽出番号にしたがって等間隔系統抽出を行った。調査の期間は1999年6月から10月までであり、その間に未返送分については督促状を送った。最終的に回収されたのは2,732票であり、回収率は54.6%である。

回収票における区別の1999年1月31日現在の神戸市の65歳以上人口の区別割合は以下の通りである（括弧の前につけた数字は回収数である。括弧内の左側の数値は回収票における割合で、右側の数値が65歳以上の実人口における割合である）。

東灘区 337人(12.3%：11.5%)、灘区 239人(8.7%：9.0%)、兵庫区 218人(8.0%：9.9%)、長田区 296人(10.8%：9.5%)、須磨区 330人(12.1%：11.5%)、垂水区 416人(15.2%：16.0%)、北区 387人(14.2%：13.4%)、中央区 219人(8.0%：8.2%)、西区 290人(10.6%：11.0%)。

回答者の基本的属性は次の通りである（性別と年齢に関しては、括弧内の左側の数値が回収票における割合で、右側が神戸市全市における割合）。性別 - 男 1,200人(43.9%：41.4%)、女 1,509人(55.2%：58.6%)、不明 23人(0.9%)。年齢 - 不明の50人を除くと平均73.6歳（標準偏差6.3歳）、最高99歳。5歳階級別では、65-69歳 1,069人(39.9%：35.3%)、70-74歳 617人

(18.9% : 27.2%)、75-79 歳 506 人(18.9% : 17.7%)、80 歳以上 490 人(18.3% : 19.8%)。世帯形態 - 単身 414 人(15.7%)、夫婦のみ 1,113 人(40.7%)、核家族 383 人(14.0%)、既婚子と同居 526 人(19.3%)、親と同居 51 人(1.9%)、その他 149 人(5.5%)、不明 96 人(3.5%)。就労状況 - 常勤の社員・職員として勤務 137 人(5.0%)、自営業主または家族従業者 251 人(9.2%)、アルバイト・パート 171 人(6.3%)、無職 1,997 人(93.6%)、不明 176 人(6.4%)。各区別の割合や男女別割合、年齢 5 歳階級別割合からいって、回収票は概ね神戸市全市の 65 歳以上人口を代表するサンプルとみなすことができよう。ただし、この調査は郵送で行われ、基本的には自記式であるために、その代表性は、自分で調査票の質問を読み、自分で回答を記入できる高齢者であるという限定つきではある。

### 3. 結果

#### (1) 近隣関係の量と質

図 1 は、8 つの交際内容それぞれについて、現在付き合いのある近所の人を 7 つのカテゴリに再編成して表示したものであり、表 1 および表 2 は、交際量の男女別平均値をはじめ基本統計量を示したものである。

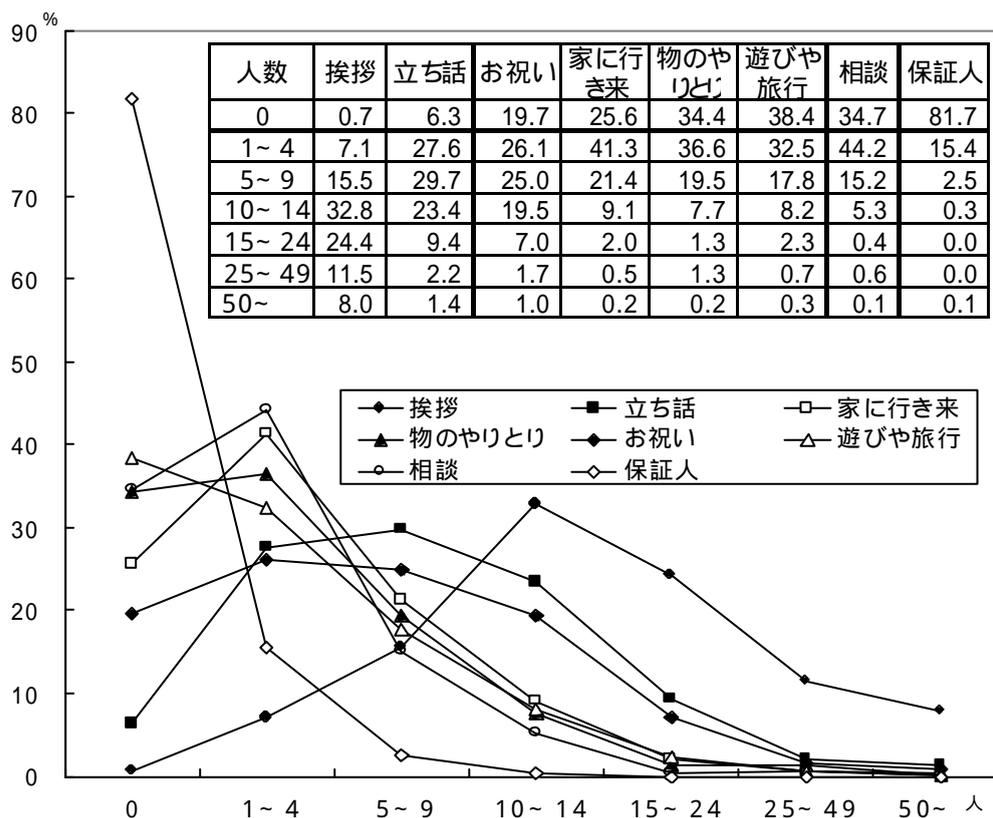


図 1 . 近所づきあいの内容と量

平均値は最大値や最小値に大きく左右されるが中央値や最頻値はそれらに左右されないのので、表 2 にはそれらを併せて記載するとともに、分布の形状を示すために歪度と尖度を記しておく。各項目の平均値は中央値や最頻値と大きく離れており、最大値は外れ値のように極端に大きい。

どの項目でも、ごく少数の人が極端に多くの友人数をあげているからである。このことは歪度と尖度にもあらわれており、交際内容別の人数の分布は正規分布からはほど遠いものになっている。この種の質問に対する自己申告/自記式の回答にはこうした極端な数値が記入されている場合が少なくないが、面接調査であっても、交際相手を具体的にあげてもらわなくとも人数を聞くと、「この辺の人全部だから何百人もいる」という返事も珍しいことではない。また、区切りのよい人数が返ってくることが多い。たとえば、図2は、「顔を合わせば、あいさつをする」人数である。5人、10人、15人・・・と、5の倍数のところ山ができています。図1は、そうした回答をカテゴリ化して全体の傾向がわかるようにしたものである。

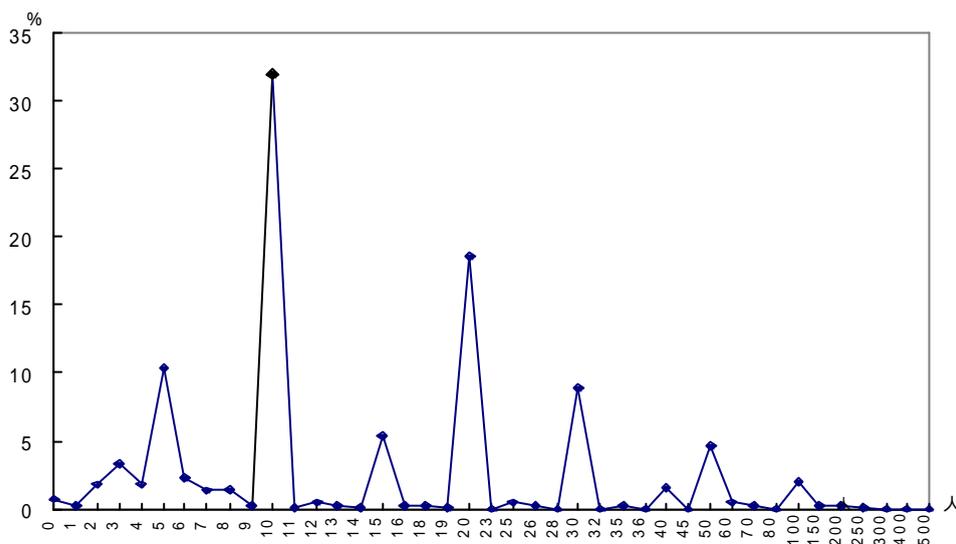


図2 .「顔を合わせば、あいさつをする」付き合いの人数の分布

ところで、図1から、近所に「顔を合わせば、あいさつをする」という最も軽い付き合いの相手が一人もいないという高齢者はごくわずかであり（非交際率 0.7 %）、神戸の高齢者の大多数はそうした付き合いのある人を近所に 10人以上もっていることがわかる。10人から 14人というのが最も多いが、25人以上という人も 20%ほどを占めている。日頃、近所のかんりの数の人とあいさつを交わしていることがうかがわれる。

次に多い付き合いは、「会えば立ち話をする」（非交際率 6%）付き合いと、「お祝い事をしたりされたりする」（非交際率 20%）付き合いである。前者の平均交際量は 8人であるが、中央値および最頻値は 5人である。5～9人が最も多くて 30%ほどを占め、次いで 1～4人も同程度の割合を占めているが、10～14人も 20%を超す。

半数以上の高齢者は、「会えば立ち話をする」付き合いのある人を 5人以上もっている。後者には儀礼的なものも含まれていると思われるが、近隣において「お祝い事をしたり、されたりする」付き合いはかなり盛んであることがうかがわれる。

以上の 3つの他の付き合いになると交際量は大きく減少する。とくに、「金銭の貸し借りや保証人になったり、なってもらう」付き合いをしている人は近所にはいないという人が 8割を占める。

「家に気軽に行ったり来たりする」（非交際率 25%）ような付き合いをしている家は近所にはいないという高齢者は 4分の 1を占めるが、60%の人は、そうした付き合いのある人を 1～9人

表1.項目別交際量の平均

	回答者(人)		平均値(人)			標準偏差(人)			変動係数			親密性指数		
	男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体	男	女
顔を合わせば、あいさつをする	1084	1304	18.9	21.2	17.0	25.3	29.8	20.9	134.2	140.9	122.6	0.05	0.05	0.06
会えば立ち話をする	1021	1297	8.1	8.0	8.2	12.3	10.6	13.6	152.5	133.6	165.2	0.12	0.13	0.12
お祝い事をしたりされたりする	981	1211	6.3	6.5	6.1	7.7	8.8	6.8	122.8	134.6	111.3	0.16	0.15	0.16
家に気軽に行ったり来たりする	968	1224	3.6	3.4	3.7	4.5	5.2	3.9	125.4	151.2	104.9	0.28	0.29	0.27
一緒に遊びや旅行に出かける	940	1168	3.4	3.5	3.4	6.7	8.9	4.3	195.9	254.7	126.5	0.29	0.29	0.30
ちょっとした物のやりとりや貸し借りを	951	1176	3.1	3.1	3.1	4.4	4.9	4.1	143.2	159.3	133.3	0.32	0.33	0.33
困ったときに相談したり助け合ったりする	946	1171	2.6	2.7	2.5	4.3	5.8	2.7	167.1	215.5	106.7	0.39	0.37	0.39
金銭の貸し借りや保証人になったりなっ	888	1031	0.5	0.6	0.4	1.6	2.1	1.1	339.6	366.2	275.8	2.06	1.75	2.41

注 項目は平均値の大きい順。

表2.項目別交際量の最大値と最小値

	最大値(人)			非交際率(%)			中央値(人)			最頻値(人)			歪度	尖度
	全体	男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体	全体
顔を合わせば、あいさつをする	500	400	500	0.7	0.6	0.8	10	10	10	10	10	10	11.3	227.4
会えば立ち話をする	410	100	410	6.3	9.9	3.3	5	5	5	5	5	10	20.9	597.9
お祝い事をしたりされたりする	100	100	80	19.7	22.4	17.8	5	5	5	0	0	10	3.5	23.6
家に気軽に行ったり来たりする	50	50	50	25.6	34.3	18.9	3	2	3	0	10	5	3.4	24.3
一緒に遊びや旅行に出かける	150	150	40	38.4	46.3	32.3	2	1	2	0	0	0	3.0	16.0
ちょっとした物のやりとりや貸し借りを	70	50	70	34.4	41.2	29.0	2	2	2	0	0	0	6.4	81.9
困ったときに相談したり助け合ったりする	100	100	20	34.5	42.9	27.8	2	2	2	0	0	0	2.0	6.2
金銭の貸し借りや保証人になったりなっ	50	50	10	81.7	80.2	82.9	0	0	0	0	0	0	3.9	19.5

注 非交際率は、最小値(0人)の%

もっており、10人以上という人も1割を占める。「ちょっとしたもののやりとりや貸し借りを  
する」(非交際率 34%) 付き合いや「一緒に遊びや旅行に出かける」(38%) 付き合い、「困った  
ときに相談したり助け合ったりする」(非交際率 35%) 付き合いになると、そうした付き合  
いをする相手を近所にもっていない人の割合が3割を超えるが、約半数の高齢者は、そうした付き  
合いをする相手を1~9人もっており、10人を超える人も1割を占める。

以上のように、「金銭の貸し借りや保証人になったり、なってもら」付き合いを除くと、大  
多数の高齢者は、かなり多くの人たちと単なる「あいさつ」以上の付き合いをしていることがわ  
かる。

## (2) 親密性指数と近隣交際指数

多くの交際量があげられる項目は広く浅い付き合いをあらわす項目とみなすことができ、交際  
量が少ない項目は狭く深い付き合いをあらわす項目とみなすことができよう。当初想定した親密  
さの程度に応じた付き合い内容と結果として見出された親密さの程度とは多少異なる。

たとえば、「お祝い事をしたり、されたりする」付き合いは、当初は比較的親密度の高い付き  
合いと想定したが、結果は比較的親密度の低い付き合いということになった。この付き合いには  
儀礼的要素も多分にあることが、そうした結果となって現れたと思われる。

以上のような親密さの程度を表すのに、ここでは、それぞれの付き合いの交際量の平均値の逆  
数を用いることにし、それを「親密性指数」と呼んでおく(表1)。たとえば、「顔を合わせば、  
あいさつをする」の親密性指数 0.05 は  $1/18.9$  で計算され、「金銭の貸し借り」の 2.06 は  $1/0.5$   
で計算される(ただし、計算に用いた平均値は小数点以下2位までの数値であるので、表1に表  
示されている小数点以下1位までの平均値を用いて算出される親密性指数とは若干異なる)。

この指数にしたがえば、「顔を合わせば、あいさつをする」の親密度を1とした場合、「金銭  
の貸し借り」の親密度は 41.2 倍 ( $=2.06/0.05$ ) とみなすことができる。各項目の親密性指数を  
各項目の人数に掛けたものを合計すれば、近隣関係の量と質を一つの数値であらわすことができ  
る。これを近隣交際指数と呼んでおく。

男女別の項目別親密性指数を用いて回答者個々の近隣交際指数得点を算出した結果の概要を示  
したのが図3である。このヒストグラムは、もとの近隣交際指数得点が、歪度と尖度にみるよう  
にかなり偏った分布をしていたので、対数(自然対数)変換を試みた結果、得られたものである。  
図中の曲線は正規分布曲線である。対数変換することによって歪度が大きく改善され、正規分布  
にかなり近い分布になっている。

## (3) 近隣交際量の対数変換

既に述べたように、個々の付き合いの交際量の分布も、正規分布からはかなりかけ離れたもの  
になっている。通常の統計的検定ではデータは正規分布に従うことを仮定しているので、正規分  
布に近づけるように変換できることが望ましい。

そこで、ここでは自然対数への変換を試みたところ、表3の歪度欄に示すように正規分布に近  
い分布に変換できた。以下、交際量のグループ間での違いを見るときには、この対数変換した値  
を用いることにする(表4、表5)。この場合は、具体的な交際人数は明示されないことになるが、  
交際量に統計的に差があるか否かをよりの確に検討することができる。

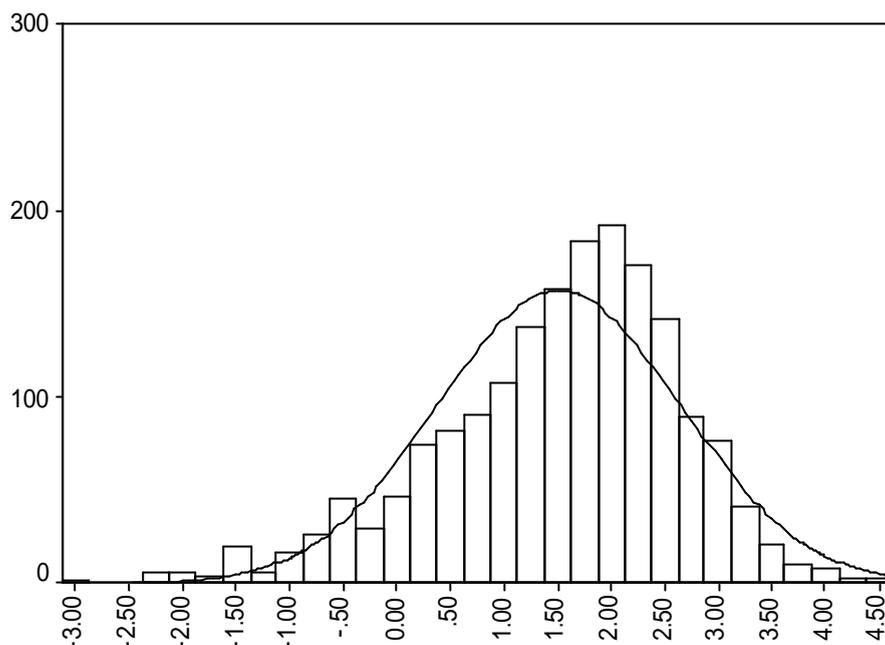


図3 . 近隣交際指数得点の分布

#### (4) 近隣交際量の男女差

一般に、男性高齢者よりも女性高齢者の方が近隣交際は活発のように思われがちであるが、近隣交際量に有意な男女差が認められるのは、表4にみるように、「ちょっとしたもののやりとりや貸し借りをする」と「一緒に遊びや旅行に出かける」、「困ったときに相談したり助け合ったりする」、「金銭の貸し借りや保証人になったり、なってもらう」の4つであり、しかも、いずれも男性の方が女性よりも交際量が多い。ただし、表1の変動係数欄にみるように、「会えば、立ち話をする」付き合いを除くと、男性の方が女性よりも交際量の個人差が大きいことがわかる。こうした個人差の大きさが、男性高齢者よりも女性高齢者の方が近隣交際が活発であるかのような印象を与えているのかもしれない。

#### (5) 年齢と近隣交際量

年齢による有意差が認められた付き合いは、「顔を合わせば、あいさつする」と「ちょっとした物のやりとりや貸し借りをする」の2つである(表4)。前者は、年齢が上がるほど交際量が減少するという線形関係が見られるが、後者ではそうした関係は見られない。70～74歳の交際量が最大で75～79歳の交際量が最小であり、80歳以上の交際量は65～69歳と同程度である。

#### (6) 居住年数と近隣交際量

その地域での居住年数が長くなれば、より多くの人と、より親密な付き合いをするようになる、と一般には考えられる。たしかに、居住歴5年未満(4年以下)の高齢者は全般的にどの付き合いでも交際量は多くはない(表4)。

しかし、取り上げた8つの付き合いのうち、居住年数によって交際量に違いが認められるのは、比較的親密度の低い3つの付き合いだけである。「顔を合わせば、あいさつする」は20年以上

表3.項目別交際量の対数

	回答者(人)		平均値			標準偏差			歪度			尖度			変動係数		
	男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体	男	女
顔を合わせば、あいさつをする	1077	1293	1.11	1.13	1.10	0.36	0.40	0.32	0.29	0.35	0.15	0.35	0.89	0.89	80.9	35.3	29.4
会えば立ち話をする	920	1254	0.78	0.77	0.79	0.34	0.37	0.32	0.34	0.39	0.30	0.14	1.30	0.88	98.7	48.0	40.1
家に気軽に行ったり来たりする	636	993	0.57	0.58	0.56	0.31	0.33	0.29	0.31	0.41	0.19	0.15	1.73	0.18	100.5	57.7	51.5
ちょっとしたもののやりとりや貸し借り	559	835	0.56	0.58	0.54	0.31	0.33	0.29	0.31	0.41	0.18	0.23	1.72	0.38	102.4	56.3	53.6
お祝い事をしたりされたりする	761	996	0.75	0.77	0.75	0.34	0.36	0.33	0.12	0.19	0.03	0.08	1.31	-0.04	35.7	47.3	44.2
一緒に遊びや旅行に出かける	505	791	0.60	0.62	0.58	0.34	0.37	0.31	0.42	0.63	0.16	1.02	1.62	-0.05	125.9	59.6	53.7
困ったときに相談したり助け合ったり	540	846	0.48	0.53	0.45	0.29	0.31	0.28	0.47	0.63	0.24	1.39	1.89	-0.17	161.8	59.2	60.6
金銭の貸し借りや保証人	176	176	0.33	0.36	0.31	0.26	0.26	0.25	0.71	0.98	0.44	3.43	2.80	-0.43	275.9	72.0	82.9

になると、「会えば立ち話をする」は 30 年以上になると、「お祝い事をしたり、されたりする」は 40 年以上になると、という具合に、親密度の高さに比例するかのように居住年数が長くなっている。とはいうものの、より親密度の高い付き合いとなると居住年数による差は認められない。そこに長く住んでいるからといって、それだけでは、より多くの人と、より親密な付き合いをするようになるわけではない、ということである。

#### (7) 住宅の種類と近隣交際量

日本の高齢者は持ち家に住む割合が高いことが知られているが(内閣府が発表している『高齢者の生活と意識に関する国際比較調査』や『高齢社会白書』を参照)、2000 年国勢調査の結果から 65 歳以上親族のいる一般世帯(1501 万世帯)の住宅の所有関係別割合をみると、「持ち家」84.1 %、「民営借家」9.1 %、「公営借家」4.4 %、「公団・公社の借家」1.4 %、「給与住宅」0.4 %、「間借り」0.6 %である。本稿で分析している調査データでは、65 歳以上の高齢者の 67.2 %が「一戸建て持ち家」居住で、11.3 %が「分譲マンション」居住であるから、持ち家率は約 80 %である。このほかには、「公営集合住宅」が 7.5 %、「民間アパート・賃貸マンション」が 6.4 %、「公団・公社賃貸住宅」が 6.1 %、「一戸建て民間借家」が 1.6 %であり、「一戸建て公営借家」や「社宅・官舎・公務員住宅」、「間借り・下宿・寮」はわずかである。

所有関係からみると大多数が持ち家であり、住宅の種類からみると大多数は一戸建てである。そうした住宅の所有関係や種類が近隣交際量に影響を与えているかを見ると(表4)、比較的親密度の低い3つの付き合いと、「一緒に遊びや旅行に出かける」で有意差が認められたが、その他の付き合いでは有意差が認められなかった。「顔を合わせば、あいさつをする」では、「一戸建て持ち家」や「分譲マンション」、「公営集合住宅」居住者の交際量が、「会えば立ち話をする」では「一戸建て持ち家」と「公営集合住宅」居住者の交際量が、「お祝い事をしたり、されたりする」では「一戸建て持ち家」居住者の交際量が他の住宅の居住者よりも有意に多い。そして、「一緒に遊びや旅行に出かける」付き合いでは、「一戸建て持ち家」と「一戸建て民間借家」といった一戸建て住宅居住者の交際量が多くなっている。そして、「民間アパート・賃貸マンション」と「公団・公社の賃貸住宅(マンション)」居住者の交際量はどの付き合いでも相対的に少ないことがわかる。しかし、以上のことを除くと、住宅の所有関係や種類と近隣交際量との関係には、とくにこれといった特徴を指摘できるような傾向は見られない。あえて指摘するならば、「一戸建て持ち家」居住者がどの付き合いでも交際量が相対的に多いことである。

#### (8) 居住地の特性と近隣交際量

近隣関係における都市と農村の違いは古くから関心が寄せられてきたテーマであるが、ここでは、自分が住んでいる地域がどのような地域であるかを回答者自身の判断にゆだねて、地域の特性と交際量との関係を調べた。回答者には、表5に示す地域特性の他に、「漁業・海浜地域」と「別荘地・保養地」も提示したが、前者では 24 ケース(有効回答の 9 %)、後者では 4 ケース(同 0.2 %)にすぎなかったため、それらは「その他」に組み入れた。

地域特性と交際量との関係を検討するときには、その地域の人口の規模や分布の状態を考慮することが必要である。人口密集地域と広い範囲に住宅が散在している地域とでは当然のことながら近隣交際量は異なるからである。ここでの地域特性は、上で述べたように回答者自身の判断に委

表4.属性別の交際量の比較(対数)-その1

			挨拶	立ち話	お祝い事	家に気軽に	遊びや旅	物のやりと	相談	保証人
性別	男	平均値	1.13	0.77	0.77	0.58	0.62	0.58	0.53	0.36
		N	1077	920	761	636	505	559	540	176
	女	平均値	1.10	0.79	0.75	0.56	0.58	0.54	0.45	0.31
		N	1293	1254	996	993	791	835	846	176
	合計	平均値	1.11	0.78	0.75	0.57	0.60	0.56	0.48	0.33
		N	2370	2174	1757	1629	1296	1394	1386	352
年齢	65~69歳	平均値	1.14	0.80	0.76	0.59	0.60	0.56	0.49	0.35
		N	791	737	601	572	479	492	513	142
	70~74歳	平均値	1.12	0.79	0.74	0.57	0.59	0.58	0.49	0.30
		N	735	665	543	506	424	419	427	97
	75~79歳	平均値	1.09	0.77	0.75	0.55	0.57	0.51	0.46	0.31
		N	441	406	318	291	224	260	237	54
	80歳以上	平均値	1.08	0.77	0.77	0.55	0.65	0.56	0.50	0.39
		N	379	343	272	242	159	209	194	53
	合計	平均値	1.11	0.79	0.76	0.57	0.60	0.56	0.48	0.33
		N	2346	2151	1734	1611	1286	1380	1371	346
居住年数別	4年以下	平均値	1.04	0.73	0.73	0.56	0.58	0.56	0.49	0.41
		度数	330	300	211	216	166	166	175	51
	5-9年	平均値	1.11	0.78	0.72	0.57	0.61	0.55	0.52	0.32
		度数	203	178	135	128	108	124	108	27
	10-19年	平均値	1.07	0.73	0.70	0.53	0.55	0.53	0.47	0.32
		度数	348	318	226	212	158	178	168	52
	20-29	平均値	1.12	0.77	0.74	0.54	0.61	0.54	0.49	0.37
		度数	320	296	236	214	172	193	197	45
	30-39年	平均値	1.14	0.80	0.74	0.56	0.58	0.56	0.45	0.29
		度数	291	270	244	209	179	180	198	59
	40-49年	平均値	1.17	0.85	0.79	0.59	0.60	0.58	0.51	0.32
		度数	289	272	236	220	173	181	190	33
	50年以上	平均値	1.18	0.84	0.81	0.60	0.65	0.59	0.49	0.37
		度数	283	261	236	211	168	181	173	38
合計	平均値	1.11	0.78	0.75	0.56	0.60	0.56	0.49	0.34	
	度数	2064	1895	1524	1410	1124	1203	1209	305	
住宅の種類別	戸建て持ち家	平均値	1.13	0.80	0.77	0.58	0.61	0.57	0.48	0.33
		N	1586	1464	1233	1115	891	955	937	220
	分譲マンション	平均値	1.12	0.75	0.72	0.56	0.59	0.52	0.53	0.36
		N	262	236	159	156	124	146	134	33
	戸建て民間借家	平均値	1.03	0.75	0.73	0.54	0.62	0.54	0.53	0.44
		N	34	32	25	26	16	19	22	8
	民間アパート賃貸マンション	平均値	1.02	0.71	0.70	0.52	0.55	0.51	0.47	0.32
		N	141	127	100	98	70	82	79	27
	公営集合住宅	平均値	1.13	0.81	0.68	0.55	0.51	0.54	0.45	0.27
		N	168	158	119	124	92	97	110	26
	公団公社賃貸	平均値	1.00	0.75	0.75	0.58	0.59	0.56	0.49	0.30
		N	142	120	92	84	81	73	80	26
	合計	平均値	1.11	0.78	0.75	0.57	0.60	0.56	0.48	0.33
		N	2333	2137	1728	1603	1274	1372	1362	340

注 網掛け部分は  $p < 0.1$  で有意差が認められたもの

表5.属性別の交際量の比較(対数)-その2

			挨拶	立ち話	お祝い事	家に気軽に	遊びや旅	物のやりと	相談	保証人
居住地の特性別	農村・田園地帯	平均値	1.14	0.82	0.83	0.61	0.68	0.60	0.48	0.36
		N	121	123	104	112	88	89	84	23
	山間部	平均値	1.12	0.79	0.70	0.59	0.57	0.58	0.49	0.33
		N	66	61	45	44	33	31	34	12
	商業・繁華街	平均値	1.13	0.77	0.79	0.59	0.63	0.55	0.48	0.38
		N	197	184	149	137	121	125	118	37
	一般住宅地	平均値	1.11	0.78	0.74	0.56	0.59	0.56	0.47	0.32
		N	1341	1217	1002	902	700	775	769	178
住宅団地	平均値	1.09	0.78	0.74	0.56	0.58	0.54	0.51	0.33	
	N	503	455	347	328	273	289	291	77	
工業地域	平均値	1.23	0.88	0.84	0.68	0.68	0.56	0.51	0.56	
	N	40	40	34	34	24	28	25	4	
その他	平均値	1.09	0.74	0.81	0.53	0.60	0.50	0.48	0.33	
	N	64	60	46	46	35	37	41	9	
合計	平均値	1.11	0.78	0.75	0.57	0.60	0.56	0.48	0.33	
	N	2332	2140	1727	1603	1274	1374	1362	340	
区別	東 灘	平均値	1.10	0.76	0.75	0.54	0.56	0.53	0.46	0.32
		N	296	260	219	178	159	167	170	40
	灘	平均値	1.13	0.81	0.80	0.59	0.64	0.60	0.54	0.38
		N	215	195	157	160	113	128	128	34
	兵 庫	平均値	1.16	0.83	0.75	0.61	0.62	0.56	0.50	0.37
		N	182	167	150	133	104	113	109	35
	長 田	平均値	1.09	0.75	0.74	0.57	0.55	0.55	0.43	0.28
		N	259	242	189	180	128	152	139	31
	須 磨	平均値	1.11	0.78	0.74	0.57	0.57	0.54	0.49	0.31
		N	283	263	205	189	160	157	168	48
	垂 水	平均値	1.07	0.78	0.73	0.54	0.56	0.54	0.48	0.32
		N	386	343	274	248	192	212	212	55
	北	平均値	1.13	0.79	0.78	0.59	0.65	0.60	0.52	0.34
		N	330	306	244	231	187	198	194	46
	中 央	平均値	1.14	0.79	0.75	0.53	0.61	0.55	0.48	0.36
		N	194	179	146	143	119	120	133	27
西	平均値	1.12	0.77	0.76	0.58	0.60	0.54	0.46	0.32	
	N	244	233	188	179	146	157	142	37	
合計	平均値	1.11	0.78	0.75	0.57	0.60	0.56	0.48	0.33	
	N	2389	2188	1772	1641	1308	1404	1395	353	

注 網掛け部分は p<0.1 で有意差が認められたもの

ねているので、そのあたりの詳細は不明であるが、交際量に有意差が認められたのは唯一「お祝いをしたり、されたりする」付き合いである。「農村・田園地帯」と「工業地域」での交際量がとくに多く、次いで「商業・繁華街」での交際量が多い。ちなみに、「工業地域」居住者の区は、東灘区、兵庫区、長田区である。意外というべきか、その他の付き合いでは交際量に有意な地域差が見られなかった。

(9) 行政区別の近隣交際量

区別の交際量に有意差がある付き合いは、「一緒に遊びに出かけたり旅行する」と「困ったときに相談したり助け合ったりする」である。前者では灘区、兵庫区、北区、中央区の交際量が全

区平均を上回っている。後者でも、灘区、兵庫区、北区の3区の交際量が全区平均を上回り、これに須磨区が加わっている。その他の付き合いでは区による有意差は認められない。

#### (10) 近隣交際量の重回帰分析

これまで近隣交際量を基本的な人口学的・社会的諸属性および地域特性ごとに個別に見てきたが、そこに示された交際量の違いは、必ずしも個々の属性あるいは特性それ自体の独自の影響力を反映したものではない。そこで、次に、先に述べたように、職の有無や世帯形態、現在住んでいるところに住み続けたいか、移りたいかといった居住意向、健康観、自己概念親密性年齢以外の要因を組み込んだ重回帰分析を試みた。表6は、それぞれの付き合いの交際量および近隣交際指数の対数変換した値を従属変数とするステップワイズ法による重回帰分析の結果である。

取り上げた独立変数のうち、どの付き合いにも有意な影響を与えていないものは、「職の有無」、「居住意向」、世帯形態のうち、「単身世帯」であること、「既婚子と同居の世帯」であること、健康観が「とても不満」であることと「とても満足」であること、住宅の種類のうち、「一戸建て持ち家」であることと「アパート・賃貸マンション」であること、居住地の類型のうち、「山間部」であることと「一般住宅地であること」、「住宅団地」であること、「工業地域」であること、そして、「心理社会的老化度」である。以下、付き合い内容ごとに交際量に影響を与える要因を見ていく。

##### 顔を合わせば、あいさつをする

交際量を促進させる要因は、「参加・活動度」、「積極的親密性」、「居住年数」であり、阻害要因は「年齢」、「日常活動老化度」、「一戸建て民間借家」、「公団・公社賃貸住宅」である。

##### 会えば立ち話をする

「顔を合わせば、あいさつをする」付き合いよりも促進要因が多くなっており、「参加・活動度」、「積極的親密性」、「居住年数」に加えて、「就学年数」と「夫婦のみの世帯」であること、「公営集合住宅」であることが交際量を促進している。

##### お祝い事をしたり、されたりする

この付き合いの交際量も「参加・活動度」と「積極的親密性」、「居住年数」が主要な促進要因になっているが、それらに加えて「夫婦のみの世帯」であることや「親と同居の世帯」であることといった世帯形態が促進的に作用している。

##### 家に気軽に行ったり来たりする

この付き合いには「居住年数」が有意な影響を与えていない。そのかわりに、というべきか、「積極的親密性」の影響力が大きくなっている。この付き合いが、そうしたスキルあるいはパーソナリティに左右され、したがって、他の付き合いよりも、より主意的選択性の高い付き合いであることがわかる。また、「夫婦のみの世帯」であることが促進要因になっているほか、「健康まあ満足」であることも促進要因になっている。そして、興味深いことは、この付き合いでは「商業地・繁華街」であることが促進要因になっていることである。

##### 一緒に遊びや旅行に出かける

この付き合いも、「参加・活動度」と「積極的親密性」、「居住年数」が主要な促進要因になっており、これらに加えて「性別」(ここでは「男」であること)が交際量を促進している。阻害要因は、「核家族世帯」であることと、「日常活動老化度」である。「日常活動老化度」が阻害要因になっていることは、行動の制約が近隣交際を阻害するという常識的解釈で納得できるである

表 6.近隣交際量の重回帰分析 (最終ステップの標準化偏回帰係数)

	挨拶	立ち話	お祝い事	家に気軽に	遊びや旅行	物のやりとり	相談	保証人	近隣交際指数
性別 (男=1, 女=0) †					0.091		0.125		-0.083
年齢 (歳)	-0.075					0.089			-0.064
就学年数 (年)		0.063							
職の有無 (有=1, 無=0) †									
年間世帯所得 (万円)							0.071		
居住年数 (年)	0.144	0.154	0.143		0.096	0.098			0.121
居住意向 (住む=1, 移る=0) †									
単身世帯 †									
夫婦のみ世帯 †		0.067	0.105	0.082					0.106
核家族世帯 †					-0.072		-0.086	-0.201	
既婚子と同居の世帯 †									
親と同居の世帯 †			0.081						
健康とても不満 †									
健康まあ不満 †		-0.068							
健康まあ満足 †				0.061					
健康とても満足 †									
積極的親密性	0.167	0.128	0.146	0.185	0.103	0.123	0.085		0.247
戸建て持ち家 †									
分譲マンション †							0.068		
戸建て民間借家 †	-0.052							0.188	
アパート賃貸マンション †									
公営集合住宅 †		0.077							0.069
公団公社賃貸住宅 †	-0.051								
農村田園地帯 †									0.069
山間部 †									
商業地 繁華街 †				0.061					0.061
一般住宅地 †									
住宅団地 †									
工業地域 †									
日常活動老化度	-0.072				-0.090	-0.079			
心理社会的老化度									
参加・活動度	0.205	0.185	0.180	0.198	0.235	0.199	0.205	0.206	0.217
有効回答数	1237	1365	1104	1001	804	884	875	219	1237
調整済みR <sup>2</sup> 乗	0.139	0.109	0.104	0.108	0.104	0.091	0.086	0.096	0.203

注 :係数の有意水準はいずれも $P < 0.05$ 。 †はダミー変数  
各係数のVIF (変動インフレーション因子)は、いずれも1.14未満で多重共線性は許容範囲である。

うが、「核家族世帯」であることが阻害要因になっていることは説明が必要であろう。世帯人員の数や世代的広がりからいって、「単身世帯」や「夫婦のみの世帯」よりも「核家族世帯」の方が交際量が多いと考えることもできるが、「一緒に遊びや旅行に出かける」付き合いは、「核家族世帯」ではない方が付き合いがしやすい、あるいは、そうした付き合いが生じる可能性が高い

と考えることもできる。

的確な表現を用意することは難しいが、「核家族世帯」の高齢者には、家族内であるべきことが他の世帯の高齢者よりも多いことが、行動をより家族志向的にすることになり、その結果として「一緒に遊びや旅行に出かける」付き合いの交際量を少なくしているということである。その意味では、「核家族世帯」の高齢者の近隣関係は、他の世帯の高齢者の近隣関係と異質であるということもできる。

ちょっとしたもののやりとりや貸し借りをする

この付き合いも、「参加・活動度」と「積極的親密性」、「居住年数」が主要な促進要因になっており、これらに加えて「年齢」が交際量を促進し、「日常活動老化度」が阻害している。

困ったときに相談したり助け合ったりする

「参加・活動度」と「積極的親密性」が主要な促進要因であることは他の付き合いと同様であるが、「居住年数」が有意ではなくなり、「性別」が影響力の大きい要因として登場している。この付き合いは、男の付き合い、といえそうである。また、この付き合いの他には「世帯所得」が有意な要因になっている付き合いはない。この種の付き合いには経済的なゆとりが必要ということであろうか。

「分譲マンション」であることが促進要因になっていることは興味深い。マンションで生活する上での諸問題を回避・解決するために居住者が協力しあっていることのあらわれであろうか。阻害要因としては「核家族世帯」だけが登場しているが、その理由としては、「一緒に遊びや旅行に出かける」付き合いと同様のことをあげることができるであろう。

金銭の貸し借りや保証人になったり、なってもら

促進要因には「参加・活動度」と「一戸建て民間借家」が登場し、「核家族世帯」が影響力の大きい阻害要因になっている。「一戸建て民間借家」が促進要因になっていることを解釈することは難しいが、近隣においてこうした付き合いをしている人はわずかであるから、「一戸建て民間借家」居住者の中にこの付き合いの交際量がとくに多い回答者がいたことが、こうした結果になってあらわれたものと考えられる。

近隣交際指数

以上の8つの付き合いの交際量を先に述べた近隣交際指数に集約して重回帰分析を試みたところ、促進要因としては「参加・活動度」、「積極的親密性」、「居住年数」、「夫婦のみ世帯」、「公営集合住宅」、「農村・田園地帯」、「商業地・繁華街」の7要因が、阻害要因としては「性別」と「年齢」の2要因が近隣交際の程度に有意な影響を与える要因として取り出された。

「男」であることは、「一緒に遊びや旅行に出かける」付き合いと「困ったときに相談したり助け合ったりする」付き合いでは促進的に作用していたが、この近隣交際指数では阻害要因になっている。全体的に見れば、やはり女性の方が近隣交際は活発と言えそうである。そして、「年齢」が上がるにつれて近隣交際は減少することが確認された。

有意な促進要因として「公営集合住宅」と「農村・田園地帯」、「商業地・繁華街」が残ったことは、そうした所の居住者の近隣関係は活発であることを示している。「農村・田園地帯」における近隣関係が活発であることは、いわば通説を裏付けるものとも言えるが、「農村・田園地帯」の対極にある「商業地・繁華街」も同様に促進要因になっている。「商業地・繁華街」において近隣関係が活発であるという事実注目しておきたい。

以上、付き合い内容ごとの要因分析と近隣交際指数の要因分析を試みた。どの付き合いの交際

量にも共通する要因に着目すると、促進要因では「参加・活動度」、「積極的親密性」、「居住年数」といった、それぞれ、行動要因、態度要因、属性要因とでも類別できる性格を異にする3つの要因であることが明らかになった。このうち、「居住年数」は、付き合い内容によっては有意な要因にはならなかった。したがって、近隣交際量を促進するもっとも一般的な要因は、「参加・活動度」と「積極的親密性」といった行動要因と態度要因であるということになる。

以上の結果は、今日の近隣関係の特質をよく反映しているといえる。すなわち、態度や行動に関わる要因の影響力が大きいということは、先に述べたよう、近隣関係がすぐれて主意的選択事項であることを証明しているということである。

阻害要因に関しては、どの付き合いにも共通する特徴的なものは見出されなかった。強いてあげれば、「核家族世帯」であることと「日常活動老化度」が、それぞれ異なる3つの付き合いに阻害的に作用していることである。それらに関しては既に述べたので、ここで繰り返すことはしない。

表6の重相関係数の2乗（調整済みR<sup>2</sup>乗）に見るように、各モデルの説明力（重回帰モデルによって説明される従属変数の変動の比率）は、この種のモデルとしては必ずしも小さいものではないが、最大でも近隣交際指数モデルの20%にとどまる。モデル改善の余地は大きいといわなければならない。しかし、相当数の変数を取り込んでいるにもかかわらず説明力が大きくないということは、近隣交際量を規定している要因は複雑多様であることを物語っていると理解したい。

(11) 近隣交際と老後の幸福感

表7は、付き合い内容別の近隣交際量（対数変換値）および近隣交際指数と老後幸福感尺度得点との積率相関係数を示したものである。いうまでもないことだが、老後の幸福感が近隣関係の如何によって大きく左右されるわけではないが、表7は、近隣交際量が多いほど明らかに幸福感が高いことを示している。とくに、近隣交際指数とポジティブ・アフェクト得点の

表7. 近隣交際量と幸福感

	肯定的 老後生活観	否定的 老後生活観	ポジティブ・ アフェクト	ネガティブ・ アフェクト
あいさつ	0.156 *** (2234)	-0.050 * (2227)	0.250 *** (1964)	-0.046 (2020)
立ち話	0.121 *** (2077)	-0.084 *** (2071)	0.211 *** (1825)	-0.061 (1880)
お祝い事	0.134 *** (1687)	-0.047 (1682)	0.207 *** (1487)	-0.039 (1525)
家に気軽に	0.166 *** (1555)	-0.100 *** (1547)	0.237 *** (1355)	-0.088 (1394)
遊びや旅行	0.195 *** (1247)	-0.059 (1238)	0.197 *** (1079)	-0.100 (1099)
物のやりとり	0.161 *** (1341)	-0.117 *** (1335)	0.223 *** (1180)	-0.078 (1218)
相談	0.195 *** (1337)	-0.104 *** (1329)	0.232 *** (1174)	-0.109 *** (1212)
保証人	0.095 ( 332)	-0.133 ( 330)	0.188 ** ( 287)	-0.053 ( 290)
近隣交際 指 数	0.186 *** (1747)	-0.059 (1738)	0.319 *** (1581)	-0.043 (1621)

\*\*\* p < 0.001, \*\* p < 0.01, \* p < 0.05 ( )内は標本数

相関係数が他に比べて格段に大きく、親密な近隣関係を多くの人と結んでいる人ほど老後の幸福感が高いことが明らかである。相関係数それ自体はどの付き合いにおいても大きいものではないから、老後の幸福感に近隣交際量それ自体が及ぼす影響はそれほど大きいものとはいえないが、

有意水準が示すように、近隣交際量が多いほど幸福感が高いという関係の確度はきわめて高いものがある。

#### 4．要約と議論

本稿では、親密度の異なる8つの付き合いを設定して、神戸市在住の65歳以上の男女の近隣交際量を分析した。あいさつ程度の軽い付き合いでは、神戸の高齢者の大多数は10人以上の相手があり、日常的に近所のかなりの数の人とあいさつを交わしている。半数以上の高齢者は、「会えば立ち話をする」付き合いのある人を5人以上もっている。「お祝い事をしたりされたりする」付き合いもかなり盛んである。それら3つの他の付き合いになると交際量は大きく減少する。とくに、「金銭の貸し借りや保証人になったり、なってもらう」付き合いをしている人は近所にはいないという人が8割を占めるが、高齢者の6割は「家に気軽に行ったり来たりする」付き合いの相手を1～9人もっており、10人以上という人も1割を占める。「ちょっとしたものやりとりや貸し借りをする」付き合いや「一緒に遊びや旅行に出かける」付き合い、「困ったときに相談したり助け合ったりする」付き合いになると非交際率は3割を超えるが、約半数の高齢者は、そうした付き合いをする相手も、やはり1～9人もっており、10人を超える人も1割を占める。

以上のように、大多数の高齢者は、かなり多くの人たちと単なる「あいさつ」以上の近隣関係を取り結んでいることがわかる。高齢者の近隣交際量から見る限り、神戸という都市の近隣関係は崩壊しているとか冷たいとは言い難い。

高齢者のそうした近隣交際量を規定している要因を個別に、また、ステップワイズ法の重回帰分析で探った。その結果、性や年齢、学歴、所得、世帯形態、住宅の種類、居住地の特性など様々な要因が近隣交際量を左右していることが認められたが、多くの付き合いに共通する影響力の強い促進要因は、「参加・活動度」、「積極的親密性」、「居住年数」といった、それぞれ性格を異にする3つの要因であった。とくに、「参加・活動度」という行動要因と「積極的親密性」というコンピテンス/ライフ・スキル（態度要因）の影響力が大きいことが明らかになった。

以上の結果は、今日の近隣関係というものがすぐれて個人の主意的選択事項であることを明確に伝えている。そして、このことが、回答者の人口学的・社会的属性や居住地の特性、あるいは区による近隣交際量に有意な差を生じさせていない理由であるといえる。

高齢化の進展に伴って高齢者に対するコミュニティ・サポートの意義と必要性への認識や高齢期における地域生活の問題に関心が高まってきている。そうした中で、近隣関係や「コミュニティ」への関心が再び高まってきている。住民にとって主意的選択事項であり表出的・情緒的關係である今日の近隣関係を、期待されるような道具的・手段的關係へと変質・再編することが可能か否かはあらためて検討しなければならない課題であるが、高齢期における地域生活の問題という点に関していうならば、本稿での分析結果は、親密な近隣関係を多くの人と結んでいる人ほど老後の幸福感は明らかに高いことを示している。

親密な関係を、より多くの人と結ぶことは、向こう三軒両隣のような狭い範囲での近所付き合いだけでは不可能である。近隣交際量に強く作用する促進要因の一つが「参加・活動度」であったという事実は、老後の幸福感につながる「多くの人との親密な近隣関係」というものが、各種の地域集団を媒介にして成立しているという事実を伝えている。

「近隣関係の再生」や「コミュニティづくり」、あるいは「コミュニティ・サポート・システムの形成」といったことが重要な地域課題になっているが、以上のことが示唆していることは、そうした課題の実現へ向けた方策は、何よりもまず、高齢者が参加・活動可能な種々の地域集団を育成することである、ということであろう。そして、高齢者個人の側からいえば、「積極的親密性」というコンピテンス/ライフ・スキルを高めることが幸福感につながる「多くの人との親密な近隣関係」を築くことになるであろう。

## 文 献

- 浅川達人・古谷野亘・安藤孝敏ほか(1999).「高齢者の社会関係の構造と量」老年社会科学、21、329-338。  
Giddens, Anthony(1989). *Sociology*, Polity Press, UK.  
金子勇(1996). 都市高齢社会と地域福祉、ミネルヴァ書房。  
古谷野亘・西村昌記・安藤孝敏ほか(2000).「都市男性高齢者の社会関係」老年社会科学、22、83-88。  
Krause, N.(1998). Neighborhood deterioration, religious coping, and changes in health during later life, *The Gerontologist*, 38, 653-664.  
Litwin, Howard(1966). *The Social Networks of Older People: A Cross-National Analysis*, Praeger.  
小田利勝(1983).「大都市における近隣関係に関する一考察 - 札幌市民の近隣交際量測定を試み - 」北海道都市学会『北海道都市』18・19号、67-116。  
小田利勝(2001).「高齢者のテレビ視聴時間と番組選好」神戸大学発達科学部研究紀要、8-2、283-301。  
小田利勝(2002).「高齢者の日常的コンピテンス/ライフ・スキルの測定尺度の開発とその利用」神戸大学発達科学部研究紀要、10-1、271-307。  
Sauer, William J. and Raymond T. Coward(1985). *Social Support Networks and the Care of the Elderly*, Springer.  
高田佳奈(2002).「郡部高齢者のソーシャルネットワークとソーシャルサポート - 兵庫県美方郡村岡町の事例から - 」神戸大学大学院総合人間科学研究科 2001 年度修士論文。  
上羽智子(2001).「インナーシティにおける高齢者の社会関係」神戸大学大学院総合人間科学研究科 2000 年度修士論文。  
Wenger, G. Clare(1996). *The Supportive Network Coping with Old Age*, George Allen & Unwin.  
Wirth, Louis(1938). Urbanism as a way of life, *American Journal of Sociology*, 44. (高橋勇悦訳「生活様式としてのアーバニズム」鈴木広編『都市化の社会学』誠信書房, 1965)。

---

## An Quantitative Analysis of Neighborhood Relationship of Elderly Japanese Living in an Urban Area

Toshikatsu Oda

A quantity of eight-categories-classified neighborhood relationship of senior citizens living in an urban area, Kobe, was measured by the use of data from mail survey to 5000 male and female over six years old. The majority of senior citizen keep closer relationship with considerably a lot of neighbors. Multiple regression analysis was applied to find factors promoting neighborhood relationship and big three factors were specified, that is, the degree of participation and activity in various groups and organizations in the community, competence/life skill of making friends, and the number of years of residence. The result shows a fresh that neighborhood relationship of today is a choice matter of a person. And that a subjective well-being in old age of persons who tied up close neighborhood relationship with a lot of people was clearly high.

**key words: the elderly, neighborhood relationship, subjective well-being, multiple regression analysis, Kobe.**

---

*Human Sciences Research*, Vol.10, No.2, 1-20, 2003.  
Faculty of Human Development, Kobe University, Japan.

*Received November 25, 2002*  
*Accepted December 25, 2002*